

執筆者等略歴

黒沢 文貴（くろさわ ふみたか）

『日本外交文書』編纂委員

上智大学大学院文学研究科博士後期課程満期退学。博士（法学）。東京女子大学現代教養学部教授。研究業績に『大戦間期の日本陸軍』（みすず書房、二〇〇〇年）『二つの「開国」と日本』（東京大学出版会、二〇一三年）など。

新見 幸彦（しんみ ゆきひこ）

『日本外交文書』編纂委員

國學院大学大学院法学研究科博士前期課程修了。元外交史料館副館長。研究業績に「ワシントン条約廃棄―海軍の論理と心理」（『政治経済史学』第一九九号、一九八二年）など。

内藤 和寿（ないとう かずひさ）

元外交史料館閲覧室長

中央大学文学部卒業。史料紹介記事に『内田康哉伝記草稿』について（『外交史料館報』第七号、一九九四年）『外務省警察史』について（『外交史料館報』第八号、一九九五年）など。

波多野 澄雄（はたの すみお）

『日本外交文書』編纂委員長

慶應義塾大学大学院法学研究科博士課程修了、博士（法学）。国立公文書館アジア歴史資料センター長、筑波大学名誉教授。研究業績に『太平洋戦争とアジア外交』（東京大学出版会、一九九六年）『日本外交の一九〇年』（編著、日本外交協会、二〇一九年）など。

浜井 和史（はまい かずふみ）

『日本外交文書』編纂委員

京都大学大学院文学研究科博士後期課程指導認定退学。博士（文学）。帝京大学共通教育センター准教授。研究業績に『海外戦没者の戦後史―遺骨帰還と慰霊』（吉川弘文館、二〇一四年）『戦没者遺骨収集と戦後日本』（吉川弘文館、二〇二〇年）など。

原口 邦紘（はらぐち くにひろ）

元『日本外交文書』編纂委員・元外交史料館副館長

九州大学大学院文学研究科博士課程中退。研究業績に「日本・カナダ関係の一考察」（『国際政治』第五八号、一九七八年）「第二次世界大戦直後に日本に『送還』された日系カナダ人のその後」（『JICA横浜海外移住資料館研究紀要』第一三号、二〇一九年）など。

（略歴は寄稿時。研究会、座談会等の参加者について掲載）

編集後記

令和三（二〇二一）年四月一五日に、外務省外交史料館は開館五〇周年を迎えました。この節目の年を記念して、本号では第一の特集として「外交史料館五〇周年」と題した特集を組み、原口邦紘、内藤和寿の両氏による開館当時を振り返る座談会や、当館に縁の深い皆様による開館五〇周年を記念したご寄稿、実務担当者による座談会を掲載いたしました。併せて、当館の五〇年間の事業を振り返る五〇年の歩みや「特別展示 外交史料館五〇年」の紹介記事を掲載しています。

第二の特集として、生涯を通じて『日本外交文書』の編纂事業に携われ、令和三年九月二四日に逝去された臼井勝美先生の追悼特集を掲載いたしました。この特集記事では、臼井先生と深い交流を有した方々からの追悼文と共に、臼井先生のご略歴並びに主要業績の一覧を掲載しています。

また本号では、令和三年一〇月二九日に黒沢文貴編纂委員をお招きして開催した研究会「歴史の記憶と記録を継承する」の記録を掲載しています。本研究会では、黒沢先生のご著書『歴史に向き合う』の内容紹介の形をとりつつ、歴史学とは何か、さらに歴史と記憶の継承にとって当館のような文書保存機関はどのような役割を果たしているかなどをご報告いただきました。さらに本号では、令和三年八月二〇日に外務大臣表彰を受賞された波多野澄雄先生の記念インタビューと共に、歴代館長からの祝辞を含む特別記事を掲載しています。

『日本外交文書 昭和期Ⅳ 日米関係 第一巻』については、その概要を紹介すると共に、『日本外交文書 昭和期Ⅳ 日米関係 第一巻』について」と題し、同巻の編纂に係わった編纂委員及び担当者が、

同巻に採録された文書から伺える吉田政権末期の日米両国の政治・経済関係の展開や、新たな編年形式の外交文書である「昭和期Ⅳ」の方向性などを論じた記録を掲載しています。

以上『外交史料館報』第三五号の概要につきご紹介いたしました。令和三年は当館にとり節目の年でありながら、コロナ禍により、当館は昨年に続いて長期の臨時休館を実施せざるを得ない状況に直面しました。依然コロナ禍の終息には時間を要すると目される状況ですが、五一年目となる本年も館員一同、当館の業務として何かなしうるかを考え、実行していく所存です。

〈本誌掲載の史料・歴史上の人物の写真のうち、出典を明記していないものは、外交史料館の所蔵史料・保有物です。なお掲載論文などの論旨は執筆者個人の見解であって、外務省の公式見解ではありません〉

外交史料館報 第三五号

令和四年三月二三日

編集発行 外務省外交史料館

東京都港区麻布台一―五―三

電話 〇三―三五八五―四五二一

印刷

東京都大田福祉工場
東京都大田区大森西二―二二―二六